

平成21年4月28日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18591145
 研究課題名（和文） 児童虐待の世代間伝達防止のための小児及び育児中の家族レジリエンスに関する研究
 研究課題名（英文） Research of family resilience of child care for the prevention of intergenerational transmission of child abuse
 研究代表者
 関 秀俊（SEKI HIDETOSHI）
 金沢大学・保健学系・教授
 研究者番号：60171328

研究成果の概要：育児中の母親において、育児困難から児童虐待に陥らないためのレジリエンス要因は、自分が育った家族との良好な関係、夫や地域のサポート、状況分析能力・心の強さ・チャレンジ精神などの母親の心理行動特性、さらに仕事に対する肯定感などであった。また中高校生では、両親の支配的な養育態度がセルフ・エスティーム形成を妨げ、自己愛の誇大性や過敏性を高め、さらに自分の本心に沿った感情・意見・思いをありのままに伝えられることを妨げ、心理的ストレスや交友関係での問題が多くなることが明らかになった。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,300,000	0	1,300,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,700,000	420,000	3,120,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：内科系臨床医学・小児科学

キーワード：児童虐待、レジリエンス、世代間伝達、家族機能、育児困難、自己愛、セルフ・エスティーム

1. 研究開始当初の背景

近年少子化がますます進む中で児童虐待が増加しており、小児保健及び母子保健分野において重大な課題になっている。このような現象の背景や原因は複合的なものではあるが、家庭内の要因も看過できない。現代の家族機能低下と児童虐待の世代間伝達の関連性、さらに児童虐待防止の観点からレジリエンスの機能を高めることの重要性に注目した。

レジリエンス (resilience) の概念は、何らかの困難に直面したときにネガティブな影響を防ぎ、その影響を最小限にとどめ、困難を乗り越えることができる全般的な能力

のことで、個人の属性として固定されたものではなく、可逆的であり、また環境により変化し新たに生み出されるような力動性があるものとされている。1980年後半の研究では、その能力は生来的なものとするが、その後、家族資源やソーシャルサポートなどの環境と個人の相互関係として捉えられるようになり、特に被虐待児の支援活動で重要とされてきている。しかし、わが国では今後ますます虐待増加の傾向にあるにもかかわらず被虐待児に対する対策は貧弱である。また被虐待体験者が親になり、育児場面に直面し虐待傾向にある家庭に対する予防的な援助もほとんどされていない。

2. 研究の目的

わが国の虐待防止分野における重要課題の一つは、虐待を受けた子どもが成人になり、再び自分の子どもを虐待するという虐待の世代間伝達の問題を解決することである。この虐待連鎖の現実を変えるためには、虐待による劣悪な環境や状況を乗り越え、虐待の連鎖を断ち切れる成人を育む力としてのレジリエンスを高めることが重要である。本研究の目的は、小児や育児をしている母親の属する家庭におけるレジリエンスの構成要素とその機能を明らかにすることである。虐待環境やその他のストレスフルな環境（両親の離婚、学校でのストレス、引きこもりなど）における子どもが、これらのストレスから立ち直るための心のケアや指導の新しい視点を提供し、効果的な環境の整備や指導に貢献できるようにする。さらに、家族機能の低下により軽度虐待傾向にある家族、虐待当事者、被虐待児（者）におけるレジリエンスの意義を検討する。

本研究では、乳幼児の育児中の母親、中学生、高校生を対象として各世代が抱える課題における家族レジリエンスを研究し、それぞれ研究Ⅰ～Ⅲとした。

3. 研究の方法

（1）研究Ⅰの対象と方法

①対象：I 県内の 5 箇所の保育園へ子どもを預けている母親を対象に無記名自記式質問紙調査を行った。

②調査内容

母親の属性：母親の年齢、子どもの人数、子どもの年齢、家族構成、母親および夫の職業と勤務形態、現在の家庭の経済状況についての満足度。育児に伴う感情と育児支援：育児場面において感じるさまざまな感情や育児支援状況、母親の育った家族との関係について。育児困難感：軽度虐待傾向を含む 10 項目。育児肯定感：12 項目。育児に関する支援状況：夫のサポート、家族のサポート、地域のサポート。

母親の原家族との関係：母親が結婚するまでに育った家族との関係。

母親の心理行動特性：育児行動において影響があると考えられる母親の心理行動特性について、先行研究と日常生活のネガティブな出来事におけるレジリエンス尺度を

参考に 18 項目から成る質問項目を作成した。

仕事に対する認識と職場における育児環境：仕事と育児の両立に関する意識について 7 項目を作成した。

各質問項目に対して「とてもそう思う」「まあまあそう思う」「あまりそう思わない」「まったく思わない」の 4 段階で評価した。

③分析方法：育児困難感と育児肯定感についての質問項目は主因子法にて因子分析を行い、育児肯定感、育児困難感、育児支援状況、母親の育った環境、母親の心理行動特性の各カテゴリーや因子の尺度得点の相互の関連性は相関係数にて評価した。

（2）研究Ⅱの対象と方法

虐待の原因には母親の自己愛の肥大化がることも指摘されており、その背景には虐待環境で育ったことによることが多いと考えられている。そこで、高校生を対象にセルフエスティーム（SE）と自己愛などの自己評価とこれまでの養育環境との関連を調査した。

①対象：K 市及びその近郊の無作為に抽出した男女共学の高等学校 6 校に通う 1～3 年生の生徒を対象とし、無記名自記式質問紙により調査した。

②調査内容：

基本属性：性別と学年を調査した。SE：Rosenberg の自尊感情尺度日本語版の 10 項目を用いた。自己愛：中山・中谷の「評価過敏性 - 誇大性自己愛尺度」を参考に、誇大性 5 項目、過敏性 5 項目からなる尺度を作成した。

両親の養育態度：子どものパーソナリティや自己概念形成に影響を与えられられる両親の養育態度をみるために、Symonds による両親の養育態度の類型（支配、服従、受容、拒否）を参考に、これまでの父親、母親の養育態度を問う 7 項目を作成した。養育者への親和性：子どもが養育者に好意や愛情的な絆を感じる親和性は、森下の「子どもの親に対する親和性尺度」を参考に、父親、母親への親和性を問う 5 項目を作成した。家族機能：家庭内の情緒的なつながりを測定する家族機能測定尺度を参考に、家族の社交性を測る項目を加え、7 項目からなる尺度を作成した。

経験：「今までに、部活や習い事などに

真剣に取り組んだことがある」や「これまでに、心を打ち明けられる友人がいた」などを「ポジティブ経験」として4項目、「今までに、教師の言葉で傷ついたことがある」や「今までに、いじめられたと感じたことがある」など、他者から傷付けられた経験を「ネガティブ経験」として7項目からなる尺度を作成した。

コミュニケーション・スキル：対人関係におけるコミュニケーション・スキルを測るために、KISS 18 と ENDCORES を参考に、「自分の感情や意見を、素直に表現できる」、「困ったときに誰かに相談することができる」などの5項目からなる尺度を独自に作成した。

友人関係：表面的な楽しさの中で群れる一方で、互いを傷つけないように気を遣いながら関わる友人関係を「表面的関係」とし、上野らの尺度を参考に4項目を作成した。健常者における対人恐怖症的な傾向を「対人恐怖的心性(以下:対人恐怖)」とし、堀井・小川をもとに2項目を作成した。攻撃性については秦の敵意攻撃インベントリをもとに「直接攻撃性」(「私は、面と向かって、相手に嫌みや悪口を言うことがある」など2項目)と「間接攻撃性」(「私は、知ったかぶりをする人にはわざと色々なことを聞いて困らせる」など2項目)を作成した。他者の能力を批判的に評価、軽視する傾向を「他者軽視」とし、速水を参考に2項目を作成した。

(3) 研究Ⅲの対象と方法

①対象：A市内の12校の中学校に通う1～3年生を対象とし、記名自記式質問紙を用いて調査した。

②調査内容：

自己表出は、相手の気持ちも考えながら、自分の本心に沿った感情・意見・思いをありのままに伝えられる表出を「直接的自己表出」、自分に自信がない、他人にどう思われているか気になるという思いから自分の本心を表出しない関わりを「非自己表出」とし、自分の本心を直接伝えられるが、一方的・威圧的に自分の思いを押し付けてしまう表出を「直接攻撃的自己表出」(以下「直接攻撃」)とし、直接自分の思いを伝えられず、関係性攻撃(人を介した攻撃)により周囲を操作し、自分の感情・意見・思いを相手に認めさせようとする表出を「間接攻撃

的自己表出」(以下「間接攻撃」)とした。

不適切な友人関係：内面的な関係を避け、互いの内面に踏み込まない関わり「関係回避」とし、気に入らない子は無視するなどして排除する、友人に指図するなどの攻撃的な関わりを「支配」とし、友人から仲間外れにされないように気を遣う、無理に明るくふるまう関わりを「仲間外れ不安」とした。

ストレス反応：岡安らの中学生用ストレス反応尺度、岡田の中学生の心理的ストレス・プロセスに関する研究などを参考に、抑うつ・不安、不機嫌・怒り、無気力・引きこもりの3つの下位尺度から12項目を作成した。

セルフ・エスティーム(SE)：Rosenbergの自尊感情尺度日本語版を参考にし、4項目からなる尺度を作成した。

自己愛：Gabbardの2種類の自己愛の特徴を参考に、誇大性、過敏性を測る項目を各3項目作成した。

不適切な養育態度：Symondsによる両親の養育態度の類型を参考に、親が子どもからの働きかけを無視するというような態度を「拒否的態度」、親が子どもを強力に統制しようとする態度を「厳格的態度」、親が子どもの言いなりとなっている態度を「服従的態度」とし、これまでの両親の養育態度を問う8項目を作成した。

家族機能：家族の機能状態を簡潔に測定できる家族機能測定尺度FACES III邦訳版を参考に、家族の社交性を測る項目を加え、家族員間の絆、家族システムの能力を「凝集・適応性」、家族外との交流を「社交性」とし、6項目を作成した。

表出場面におけるネガティブな経験：小学生の頃に、「思ったことをあまり言わなかった」、「思ったことがなかなか伝わらなかった」、「思ったことをなかなか言えなくてもやもやした」というコミュニケーションにおける段階的なネガティブ経験3項目を作成した。

社会スキル：対人関係を円滑に運ぶため、関わりを持つ段階でのスキルを初歩的スキルとして「初対面の人にも自分からあいさつができる」、「間違ったことをしたと感じたときは、自分から謝ることができる」の2項目を作成した。また、スキル教育に関して「学校で学んだコミュニケーションのとり方は、今も役立っている」という

1 項目を作成した。

以上の質問項目は、5 件法により測定し得点化した。各カテゴリーの合計点を算出し、尺度得点として用いた。

4. 研究成果

(1) 研究Ⅰの成果

保育園へ子どもを預けている母親 956 名から有効回答が得られ、育児行動におけるレジリエンスの構成要因を検討した。因子分析により育児感情は「育児での不安」、「育児での精神的ストレス」、「ゆとりのなさ」、「育児に対する肯定的感情」、「親としての成長」、「子どもに対する肯定的捉え方」が抽出された。

肯定的育児感情と育児困難性の尺度得点分布の組み合わせで母親を 4 群に分類し、平均以上の育児困難性を持ちながらも否定的な育児にならず肯定的育児感情を持つことができる力を育児におけるレジリエンスと考え、その構成要因を分析した。

育児困難性が高く、育児肯定感が低い C タイプと、同程度に育児困難性は高いが育児肯定感も高い B タイプを比較し、有意差を認めた要因は、家庭の経済状態に不満がないこと、母親の原家族との良好な関係、夫と地域のサポート、状況分析能力・心の強さ・チャレンジ精神などの母親の心理行動特性、さらに仕事に対する肯定感など確認された。したがってこれらの要因が育児場面でのレジリエンスとなっていることが明らかになった。

(2) 研究Ⅱの成果

1,114 名から有効回答が得られた。両親のこれまでの受容的養育態度は SE と正の相関がみられ、過同調的態度は自己愛の誇大性および過敏性と正の相関がみられた。また支配的養育態度は、SE と負の相関があり、過敏性と正の相関がみられた。養育者への親和性は SE と正の相関があり、過敏性と負の相関がみられた。自己のネガティブな経験は SE と負の相関、過敏性と正の相関がみられ、またコミュニケーションスキルは過敏性と負の相関がみられた。表面的な友人関係や対人恐怖は、SE と負の相関があり、過敏性と正の相関がみられた。また友人関係における攻撃性や他者軽視は、自己愛の誇大性・過敏性と正の相関がみられた。

高校生において、これまでの両親の受容的養育態度は SE を高めるが、過同調的養育態度や支配的養育態度は自己愛の誇大性または過敏性を高めることが明らかになった。さらに、自己愛の過敏性が高い場合は、友人関係が表面的または攻撃的になるが、一方 SE はこのような不適切な友人関係を改善する重要な役割を果たしていることが示唆された。これらのことより、青年期の問題行動や育児期での子ども虐待を防ぐためには、過敏性や誇大性が過度に増大する自己愛を制御する必要があり、また SE も高められる受容的養育態度や環境が重要であると考えられた。

(3) 研究Ⅲの成果

1,267 名から有効回答が得られた。

①自己表出の現状：各カテゴリーにおいて、項目毎に「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた人の割合を算出した。直接的自己表出では、ほとんどの項目で相手(家族・友人)の違いによる割合に差はあまりみられなかったが、男子に比べ女子が有意に高かった。他者尊重の項目の割合は自己主張の項目に比べて相手にかかわらず男女とも 20%～40% 低かった。非自己表出では、男女ともに家族より友人に対しての割合が高かったが、家族に対して男子が、友人に対して女子が有意に高かった。直接攻撃では、男女ともに友人より家族に対しての割合が高く、家族に対して女子が有意に高かった。間接攻撃では、家族に対して女子が有意に高かった。

②自己表出カテゴリー間の相関：家族・友人への直接的自己表出は、それぞれ間接攻撃と負の相関があった。また、非自己表出、直接攻撃、間接攻撃の不適切な自己表出間には、全般的に正の相関がみられた。さらに、友人への非自己表出と友人への間接攻撃、家族への直接攻撃に正の相関がみられた。

③不適切な友人関係の現状と自己表出との相関：不適切な友人関係において、「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた人の割合は、ほとんどの項目において男子の方が高く 25～50% を占めていた。直接的自己表出は関係回避、支配と負の相関が、非自己表出は関係回避、仲間外れ不安と正の相関が、直接攻撃・間接攻撃は支配と正の相関がみられた。直接攻撃・間接攻撃と

関係回避、仲間外れ不安との間に相関はみられなかった。

④ストレス反応の現状と自己表出との相関：ストレス反応について「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた人の割合は、ほとんどの項目において女子の方が高く30～45%を占めていた。直接的自己表出は、すべてのストレス反応と負の相関がみられた。また、すべてのストレス反応は、家族より友人に対する非自己表出、友人より家族に対する直接攻撃・間接攻撃との間に比較的強い正の相関がみられた。また、これらに男女差は見られなかった。

⑤自己認識：自己認識と自己表出の関係をみると、直接的自己表出とSEの間には正の相関がみられ、その他の表出との間には負の相関がみられた。直接的自己表出と自己愛の過敏性との間には負の相関がみられ、その他の表出とは正の相関がみられた。間接攻撃、直接攻撃と自己愛の誇大性との間には正の相関がみられた。

⑥不適切な養育態度：不適切な養育態度と自己表出の関係をみると、直接的自己表出と不適切な養育態度の各因子の間には負の相関が見られ、その他の表出との間には正の相関がみられた。直接的自己表出と拒否的態度の間には比較的強い負の相関が、直接攻撃・間接攻撃と厳格的態度との間には比較的強い正の相関がみられた。

⑦家族機能：家族機能と自己表出との関係をみると、直接的自己表出と家族機能の各因子との間には正の相関がみられ、家族に対する間接攻撃との間には負の相関がみられた。

⑧社会スキル：社会スキルと自己表出の関係をみると、直接的自己表出と初歩的スキル、スキル教育との間に正の相関がみられた。

⑨表出場面でのネガティブな経験：直接的自己表出とネガティブ経験との間に負の相関がみられた。非自己表出、間接攻撃との間には正の相関がみられた。

以上より、思春期は家族より友人との関わりも重要になってくる時期であるが、友人関係を良好に保ち、ストレス反応を軽減させるためには、友人だけでなく家族に対しても自分の思いを伝えられるということが重要で、さらにそれを支える受容的な養育態度や家族機能が中学生のストレスに対するレジリエンスになっていると考えられ

た。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

① 表亜沙美、関秀俊、中学生および高校生の非肥満群におけるダイエット行動の背景、小児保健いしかわ、20巻、27-31、2007、査読無

② 丁子智恵子、関秀俊、中高生の歯科保健行動における健康統制観およびセルフ・エスティームの意義、小児保健いしかわ、19巻、7-12、2007、査読無

③ 長田春香、岩本文月、大秦加奈子、岡田洋子、蒲原由記、筒井翔子、松井希代子、関秀俊、中学生の日常的ストレスにおけるレジリエンスの意義、小児保健研究、65巻2号、246-254、2006、査読有

[学会発表] (計4件)

① 関秀俊、高校生におけるセルフ・エスティームおよび自己愛の形成と対人関係への影響、第55回日本小児保健学会、2008.9.26、札幌

② 関秀俊、第54回日本小児保健学会、2007.9.21、前橋

③ 関秀俊、育児困難を抱えた母親におけるレジリエンスの検討、第54回日本小児保健学会、2007.9.21、前橋

④ 関秀俊、父親の育児参加が家族機能と母親の育児負担に及ぼす影響、第53回日本小児保健学会、2006.10.28、甲府

6. 研究組織

(1) 研究代表者

関 秀俊 (SEKI HIDETOSHI)

金沢大学・保健学系・教授

研究者番号：60171328

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし